



合併二十周年特集

市長・議長対談

みながさんと共に
村づくりを

赤子だったわが子も今は成人、社会の一役をになつて巣立つていく。その足どり、羽ばたきは、生涯忘れ得ないでしょう。

私達の八潮も、ことし合併二十周年を迎え、幾多の変遷を経て、今日に至りました。

十月号では、さらにより良い明日の八潮の町づくりをみなさんと共に進めるため、二十年の歩みをふりかえり、これからの展望をふくめ、市長、市議会議員にお話しを伺いました。対談の一部を掲載いたします。

やしお
羽ばたけ

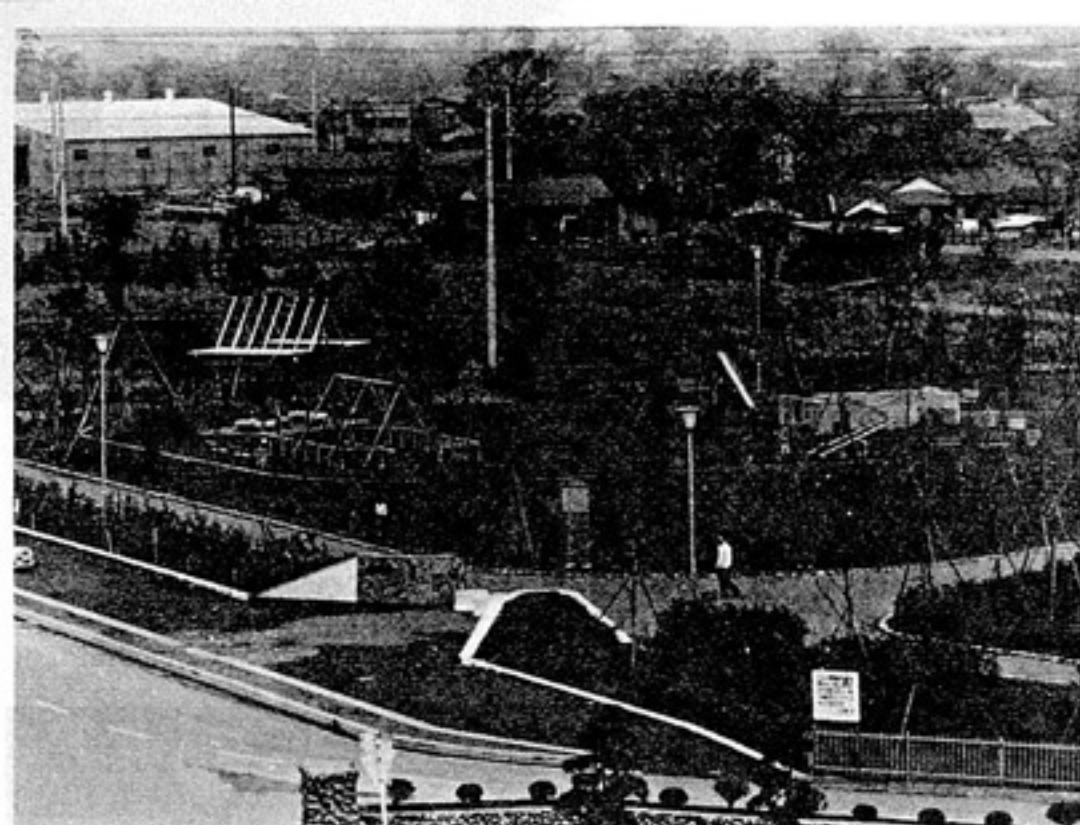


鈴木市長



高橋議長

満20歳の
明日に



▲着々と進められる区画整理事業(中央公園)

因だと思ひます。
議長 合併した当時、確かに旧村意識が強かったが、それを一本化に結んでいったのが適合婦人会、連合青年団など各種の団体の統合と理解協力だったと言います。今水道の話が出ましたが私の住む所に水道が入った当時、隣の足立区六ツ木にはまだ水道が入っていませんでした。これなども合併の利点であったと言いますね。それから中学校の統合の問題も、義務教育の最終課程は同じ校舎で生徒が仲よく学び、そして社会に巣立つていくのだという考えで誰一人として反対はなかった。当時のことを考えると嬉しかったですね。
市長 そう言えば、町制施行前は薬局があるかないかの問題まであったし、道路も主要道路の一部分がわずかに舗装された程度でした。議長 当時のことを考えると、執行部も随分苦労したとおもいます。司会 町制後八年を歩み市制から現在に至るまで、行政需要は拡大する一方で、困難な年を迎えます都市化と共に公共施設、都市社会

施設の不足、基盤の整備とさまざまな問題をかかえ、とりわけ人口急増と義務教育施設が真つ先不足ということでご苦労が多い訳です。この点についてお話し願います。
市長 町制施行昭和三十九年以降は、国の経済成長と共に、首都に隣接の地の利から社会増が著しくそれも急激に企業や住宅が進出しました。それに伴ない町の財源も豊かになりましたが転入する人口新築家屋の激しい増加現象が町の様相を一変することになった訳です。八潮、伊草の両団地もできましたし、八潮のみならず、人口急増と開発の激しさの中で、これに対応してゆくための行政は、本当に大変だったですね。
議長 そうですね。昭和三十四年の工場誘致条例によって、大きな工場が誘致されたことも一つの動機と言えましょうが、条例が間もなく廃案となり、其の後も中小企業、事業所も盛んに進出しましたし、工業団地、住宅団地の建設などが拍車をかけた格好で、当時から見れば、今ほどの人口増は全く予期していませんでした。
昭和四十五年の特別措置法によって、市になるのは昭和四十七年一月十五日、その前年に庁舎の建設に踏み切ったという事は、当時財政的には大変でしたが、今となっては良かったとおもいます。
また、他では見られない、学校体育館、プールの三点セットの教育施設整備の行政を進められたという事は、他にたけ遅れる部分もありますが、やはり執行部と議

司会 一口に都市化のヒズミと言いますが、今までお話しいただいたように都市化に対しての基盤整備がなかったところに急激な社会増と云うことで混乱はありましたけれども、都市計画事業、区画整理や公共下水道、道路整備その他上水道事業など着々推進されています。まだ当分都市的基盤の整備は続くとおもいますが……
市長 確かに八潮は歴史の浅い新興都市でもあるし、開発途上にあります。都市基盤、環境整備、教育福祉とあらゆる面でまだまだやらねばならぬ問題が山積していま

す。これらを財政の許す限り一つ一つ解決していかねばならぬといひましょうね。
議長 福祉や教育の行政は、市は好むと好まざるにかかわらず推進しなければならぬとおもいます。ただこれから市は新しい仕事をしたいと上で何を目標にしていかが問題だとおもいます。
公共下水道、地下鉄誘致、郵便局、警察署、公立医療機関、総合会館、高校も更に一つ一校……これからの何とかがまとめていかなければなりませんね。
市長 そうです。この問題については、現在一応昭和六十年目途の総合振興計画を策定中ですので、その目標にそって更に前進したいとおもいます。
司会 おいそがしいところ執行機関、議決機関の長の立場で二十年をふりかえり、更に前進のために話し合いいただきありがとうございます。

▼元気に飛んで跳ね回る子どもたち



明るく住みよい
健康都市に

大同団結して
村づくりを推進

司会 九月二十八日合併二十周年を迎え、明年一月十五日は市制五周年を迎えます。これを記念し、市長、議長のお二人に、二十年の歩みを回顧し対談を願います。
市長 合併当時私は八条村の収入役で、合併後も収入役の職務代理をしておりました。当時は職員が

村から町、町から市
都市化の波を
乗り越えて

司会 合併の目的、三か村の大同団結によって、自治体の財政力の強化、行政能力の向上、さらに農

約五十名程度で、旧八幡村の役場を改造し昭和三十一年九月二十八日、新村がスタートしたわけですね。議長 私は合併時には議員でなかったのですが翌三十二年九月選挙に当選させていただき、その後議員を勤めさせていただいております。今市長が言われたように、当時は、田んぼばかりで道路といったら舗装一本ある訳でもなかったですね。でも自分達の考えとして八潮は大同団結して、それこそ大八潮を建設するのだというような立場に立つてきました。執行者と議会が、相互理解によって今日まで歩んできたと考えます。

市民のうごき

10月1日現在 (住民基本台帳)	
人口	55,533人
男	28,833人
女	26,700人
世帯数	15,846世帯
(前月比)	70人増、2世帯増)
面積	18.12km ²





農事センター

昭和35年に農事センターが建設されました。明日の農業をきり開いてゆくために、農業従事者の研修所として、大きな役割を果たしました。

農業技術の改良、農業経営の近代化等についての研修、生活改善、料理講習と幅広い事業が行われ、文化的に遅れがちな八潮において、新しい村を建設するにあたり重要な荷手となりました。

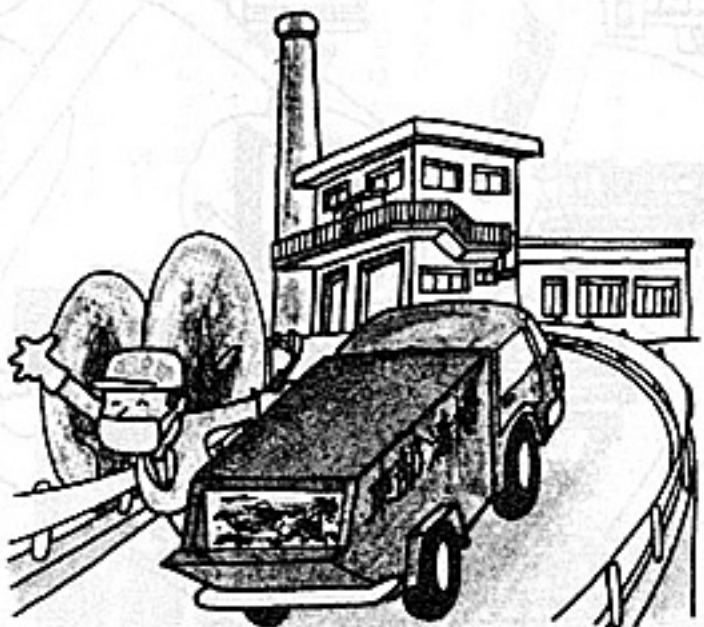
八潮中学校設立

次代を担う子どもの教育の充実と、早く3村の人々が融和することを希望して、統合中学（八潮中学校）が設立されました。子と子の結びつきが親と親の結びつきをつくり、村民が一体となってゆきました。



東部清掃組合設立

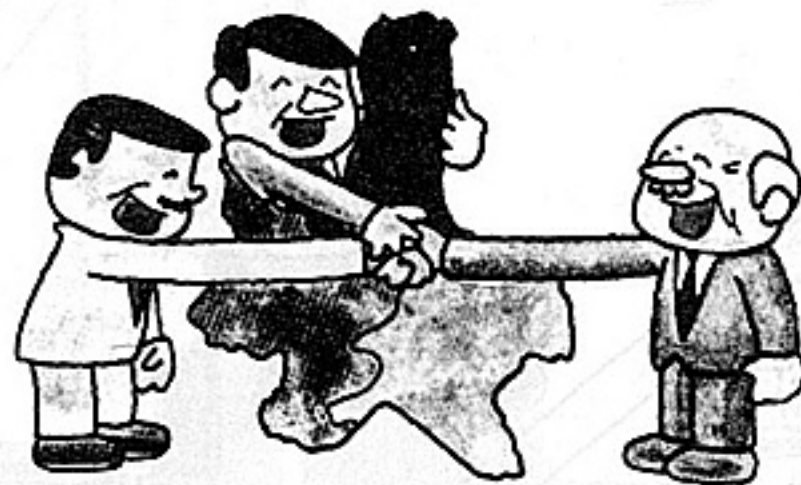
昭和37年5月地下鉄日比谷線の東武線への乗り入れによって、東武線沿線の市町村は加速度的に人口が増え続けました。わが八潮市も東京に隣接する地理的關係上、多分にもれず人口が増加しました。この県南地域の人口増はゴミやし尿の処理をどうするかという問題に発展してゆきました。そこで越谷市、草加市、三郷町、八潮町、吉川町、松伏村の二市三町一村が協議をし東武清掃組合が昭和40年10月に設立しました。



長い歴史の年輪に刻まれ、いま、八潮は明日に向けて大きく前進しようとしています。

一がいに20年といいますが、その歩みの一つ一つをたどると今でも、皆さんの記憶に残っているものもたくさんあると思います。

このページでは、村から町へ、町から市へと移り変わっていく中で、とくに大きな出来事をイラスト及び写真で追ってみました。



3か村合併

昭和31年9月28日、八条村、八幡村、潮止村の3か村が合併して八潮村が誕生しました。当時は草加市合併、東京都合併の気運もありましたが、村は村同志で合併した方がよいという村民の総意のもとに3か村合併となりました。

31～35年

水道はじまる

昭和34年10月22日、八潮第一簡易水道が完成しました。井戸、手押ポンプで水を汲みあげ、それを汲して使用していただけに、蛇口をひねると安全で衛生的な水を使用することができるようになった喜びにはひとしおのものがありました。



村民を結んだ有線放送

電話も自動車もほとんどなかった八潮では、有線放送は村民と村民を結びつける大きな役割を果たしました。



20年の歩みをたどる 市民の心づくべき歴史

健康相談室開設

お米やその他食物を堀や川で洗うとか、この頃の村民の衛生観念は今では考えられない程遅れていました。

そこで、村では健康相談室を開設し、衛生観念の普及に努めました。



公民館結婚式

悪い習慣を除き、住みよい明るい生活を目指して生活改善運動が公民館を中心に行われました。その一環として「七五三の祝」等が行われましたが、公民館結婚式もその一つです。



老人クラブ結成

昭和38年7月から9月にかけて、八潮の全地区に老人クラブが結成されました。

お年寄の生がいくつくりの場として、楽しい憩いの場として老人クラブはお年寄のこの上のない存在になっております。



工場誘致条例

昭和三十四年十月八日「八潮村工場誘致条例」が公布されました。この条例は、工場の新設を奨励し、産業の振興をはかり、村の進展を期して制定されたものです。折しも、昭和三十五年七月に池田内閣が成立しました。ご存知のように池田内閣は日本でこれ程国民に受けた政策はないといわれている「所得倍増政策」を打ち出しました。シワガレタ声で「私はウソを申しません」と言っていた国会演説の場面は恐らく皆さんも記憶に残っていることと思います。たしかに、この所得倍増政策は歓喜を満ちて国民に受け入れられました。国民の中にはこの政策が

町村合併促進法

昭和二十八年に「町村合併促進法」が制定されました。この法律は、小規模の町村を合併し、規模を適正化し、組織や運営を合理化若しくは能率化し、住民の福祉を増進することを目標に制定されました。この法律に基づいて、日本国中至るところで町村の合併が行われ

取材メモ

今年八条村（立ノ堀は草加市へ）八幡村、潮止村の三か村が合併して二十周年を迎えました。この二十年の間に八潮は村から町へ、町から市へと飛躍的な発展を遂げました。

発展のあしあとをみつめると、いくつもの大きな要因に促されていることがわかります。その要因について、取材メモとしてご紹介いたします。



市制施行

首都東京に隣接する地理的条件も手伝って、工場、住宅、人口は急速に増加いたしました。そこで、町では住民の意向を打診し、住みよい明るい街づくりをめざして、昭和47年1月15日に、特別措置法の定める市としての要件が備り、埼玉県で34番目の市として市制を施行しました。



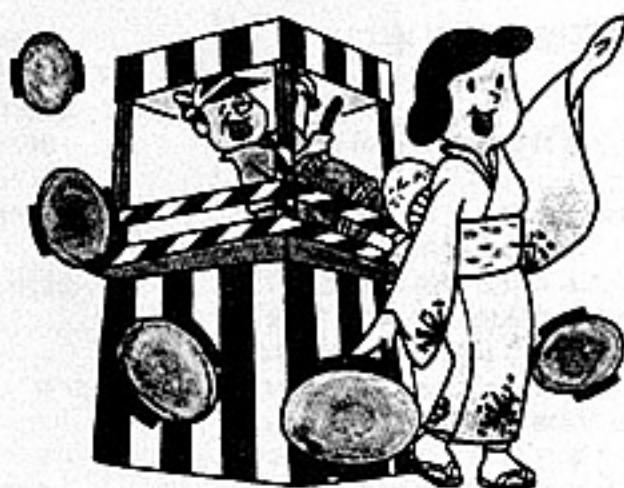
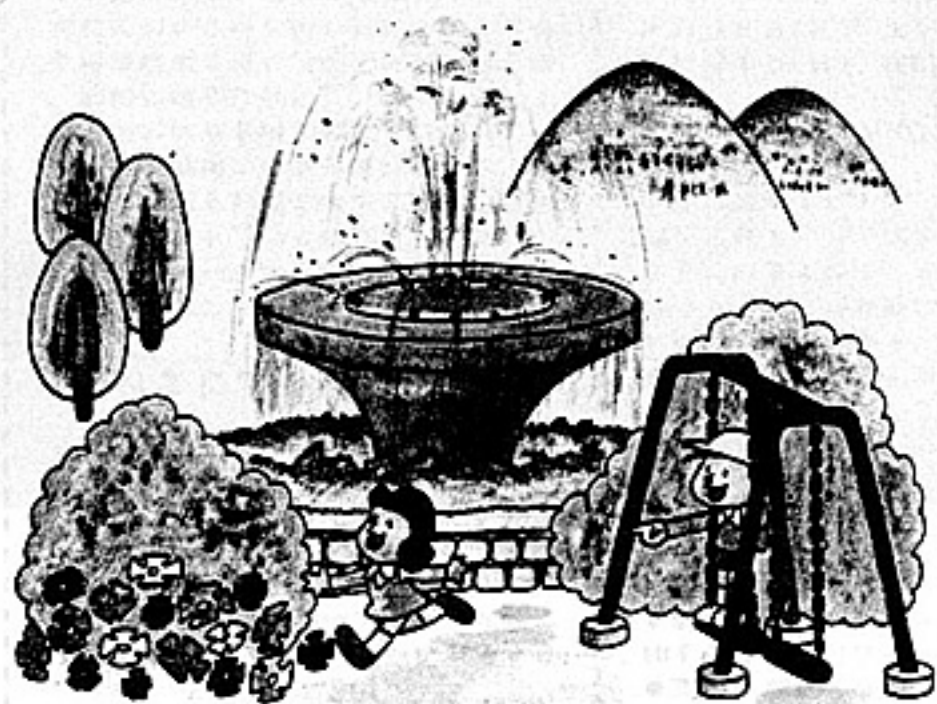
伊草・八潮団地入居はじまる

昭和46年7月頃、伊草・八潮団地が各々完成し、8月から入居がはじまりました。この伊草・八潮団地の入居を境として、民間住宅の建設も一層拍車がかかり、人口は急激に増加の一途をたどりました。学校は作っても作っても、児童、生徒の増加が予想をはるかに上まわり、プレハブ校舎を作らざるを得ないことになってしまいました。

46～51年

中央公園オープン

緑豊かで秩序ある清潔な街づくりをめざして、市では区画整理事業を行っております。現在第一、第二区画整理事業を行っておりますが、第一区画整理事業の地域内（市役所前）に中央公園がオープンしました。公園には噴水、子どもの遊戯施設が整備されており、日曜日などは子どもや家族づれの人たちで、大変にぎわっております。



八潮音頭誕生

「ハア一緑広がる関東平野……」ではじまる八潮音頭は昭和48年8月10日に誕生しました。8月10日の発表会には歌手の英亜里を招き盛大に行なわれました。この八潮音頭は市制施行を記念して、郷土に郷土の歌という市民の願いのもとに実現しました。八潮音頭が誕生した夏には市内全地区30余数の会場で盆踊り大会が開かれました。



この頃までは、人口増と言ってもゆるやかなカーブを描き人口が増えていたが、この昭和四十六年を境として人口が急激に増加しています。

ちなみに、昭和四十四年の人口が二万八千八百八十人であったのが昭和四十八年には四万八千二百九十六人になっております。僅か四年間で約二万人の増ですから、毎年五千八百人づつ増加したことになります。

また、宅地造成の関係をみると昭和四十四年に九千九百十二戸であったものが、昭和四十八年には一万三千九百七十八戸と、四年間の間に約四千戸増加していますので、毎年、一千戸づつ増えている勘定になります。

このように、団地進出の印象は民間業者の宅地造成のきっかけにもなりました。そして、それは、空前の行政需用の増加を示し、特に学校建設に迫れることになり、八潮の台所を苦しいものとししました。

41～45年

第4小学校新設

昭和39年町制施行以来、工場、住宅の進出が著しく、人口も急激に増加しました。特に、伊草・八潮団地の入居時を境として人口の増加もピークに達しました。そしてそれは児童生徒の急激な増加を見、学校建設に追われることになりました。そうした事態の幕あけとして第4小学校は建設されました。



町立保育所開所

工場の進出と人口増に伴って八潮には若い世帯が増加いたしました。それはまた働く婦人の増加にもつながりました。そこで働くお母さんに代って子どものお世話をする保育所が昭和44年に初めて南川崎に設置されました。



郷土研究会発足

古きをたずねて新しきを知る、温故知新という諺ないしは教訓として受けつがれてきました。そのため、個人的には古き事を調査したり、研究したりしていた人が多かったようですが、組織的なものはありませんでした。そこで、現会長の国枝氏を初めとする有志が音頭をとって、昭和44年に郷土研究会が発足しました。発足当時会員30余名でしたが、今では100名を越す程に発展しております。

伊草・八潮団地の建設

昭和四十六年七月頃、伊草・八潮団地が完成しました。



消防署完成

工場が増加し、住宅が密集してくると、火事が起きると仕事を放り出して、消防活動にあたる消防団だけでは市民の生命と財産を守るには不十分な体勢になってきました。火事は起る前に起さないようにすることが先決で、常時、それらの監視及び指導の体制が必要となってきました。こうした背景のもとで、昭和45年4月消防本部署を設置し、5月には消防本部庁舎が完成しました。

何を意味するのかかわからず、単純に「所得が倍になるのでは結構なことだ」と受け入れられていたフシも見られましたが……

所得倍増政策は空前の経済の高度成長を生みだしました。質素倹約を美徳としていた日本人が、「使い捨ての浪費が美徳」の観念に移り変わったのもこの時期です。

この頃は、よく「投資が投資を生む」と言う言葉が使われました。この言葉の示す如く、民間設備投資は雪だるま式に増え続けました。日本国中どこへいっても工事をやっていないところはないというほどに活発に設備投資が行なわれました。

東京に隣接する地理的好条件をもち、「工場誘致条例」を制定し受け入れ体制を用意していたこの八潮に、工場が急激に進出してきたのはもつともなことでした。

ちなみに、昭和三十五年を前後して、工場数を見ると、昭和三十三年までは六十二社にすぎなかった工場が、昭和四十年には二八三社になり、実に四倍にふくれあがっております。

「工場誘致条例」はその後、昭和三十八年十二月に廃止されましたが、八潮の発展に大きな貢献を果たした一つであると言っても過言ではありません。